

ラジオドラマ 『行くな、高橋』

BGM 開演ブザー

ナレーション

街のはずれにあるバス停に、おれはボストンバッグを一つだけ持ってやって来た。風は、今来た道の方から、これから行く道の先へと向かって吹いていた。追い風というよりは、まるでおれをこの街から追い出すような、負け犬への嘲りだった。だが、どんな風にもおれはおれの帆をたたまない。進んで行くことをやめないと、あの日に誓ったんだ。

ユージ 「たかはしーっ！」

ナレーション

向こうから、ユージが走ってくるのが見えた。おれの名を呼びながら、必死で。引きとめる気か？ それなら無駄だ。おれはもう、行くと決めたんだ。

ユージ 「逃げるのか？」

ナレーション

ユージは肩で息をしながら言った。

高橋 「逃げるんじゃない。進むんだ」

ユージ 「いや、お前が行こうとしているのは楽な道だ。楽な方へ進もうとしているだけだ」

高橋 「お前に何が分かる」

ユージ 「分かるさ。あの日、お前とお手玉で戦った、おれならな。どうして古典お手玉をやめてしまうんだ。ニュースタイルお手玉なんて、おもちやメーカーの陰謀だぞ」

高橋

「おれにはもうばあちゃんはいない。おれにお手玉を縫ってくれる人はもうこの世にはいないんだ。中に入れる小豆も、みんな近所のガキに食われちゃった。今はもう、金持ちのガキの時代だ。ニュースタイル

お手玉を駆使したフリースタイルこそが、これからのお手玉の道だ」

ユージ

「大切な小豆を食べたカタキに、寝返るってことだぞ。それにフリースタイルはまるでラップバトルみたいに相手を罵るような競技だ。そこにお手玉の魂はない」

高橋

「分かってるよ。まあ、お前の小豆は食わないで置いてやるよ。それがダチとしてお前にしてやれる最後だ」

ナレーション

ユージは震えていた。無理もない。時代は、布と小豆ではあちゃんが作ってくれるお手玉から、ダイキャスト製のカラフルお手玉に変わった。操る玉も2つから3つに増えた。ユージのように古典式お手玉にこだわりを持つ者はまだ多くいるが、いざ戦いともなれば、ニュースタイトルお手玉の方が明らかに強いのだった。おれは強さを求めた。ユージはそんなおれを、許せないのだ。

高橋

「バスが来る。じゃあな」

ナレーション

遠くの方に、おれの乗るバスが見えていた。

ユージ

「待て。おれと勝負しろ。あのバスがここに着くまでだ」

高橋

「勝負は見えてる」

ユージ

「黙れ。構えろっ！」

ナレーション

仕方ない。こいつには、分からせてやる必要がある。どちらが強いのかということ。

BGM バトル開始

ユージ

「炎のお手玉ニア！ ユージ！」

高橋

「静かなるスリーポードリスト、高橋」

高橋・ユージ

「はじめっ！」

ユージ

「いち、にーい、さーん、しーい」（ゆっくり数える）

高橋

「いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち」（早く数える）

ナレーション

ふっ。しよせんは古典式。やはり遅い。ニュースタイルの方が3倍以上のスピードで操れる。

ユージ

「負けねえぞ、高橋。お前には分かるはずだ、このおれの、お手玉史上最も美しいと言われるこのループが。お前を輪廻の彼方に葬り去ってやる」

高橋

「笑止っ！ 貴様には見えぬか、おれのボールの軌道が。銀河系宇宙の全ての惑星の公転軌道さ。おれは今この手に、ギャラクシーを抱いている」

ユージ

「ふん、お前が手玉に取られないよう気をつけな」

高橋

「貴様こそ自分の玉で目を回すんじゃないぞ、トンボのようにつかまえられるよう気をつけな」

ナレーション

バスが迫っていた。その姿が次第に大きくなってくる。

高橋

「とどめだっ！」

ナレーション

おれはさらに回転を上げた。しかし、まだニュースタイルを始めて3日しか経っていないせいか、回転速度に耐えきれず、手ににじんだ汗でボールが滑ってしまった！

高橋

「しまった・・・」

ナレーション

ボールが落ちると、バスが到着すると、同時だった。

3秒ほど間を開ける

BGM エンジン音(バスが走り去っていく感じで)

ユージ 「勝負あったな。落としたり、負けだ」

高橋 「し、しかし・・・」

ユージ 「お前にはまだ分らないか。おれが投げているのはお手玉じゃない。心を、投じているのさ。お前は心をないがしろにしたから、玉が手から落ちたのさ」

高橋 「おれの、負けか」

ユージ 「行くなよ、高橋。今のお前じゃ、進んでもその先は行き止まりだ。もう一度、おれと古典式お手玉をやろう」

ナレーション 「するとユージは、ポケットから見覚えのあるお手玉を取り出し、おれに差し出した。」

高橋 「こ、これは・・・」

ユージ 「お前がおれを古典式お手玉に誘った時、くれたやつだ。確かにお前のばあちゃんが縫ってくれたものだぜ。ちよつと古びてしまっただけはいるが、大切に保管していたんだ。まだ十分に、戦えるはずだぜ」

高橋 「ユージ・・・」

ナレーション 「こうしておれは、再び、古典式お手玉の世界に戻っていったのだった。そしてユージと2人でフリースタイルラップバトルお手玉というものを考案し、今、おれたちは互いをディスリ合っている。でも大丈夫なんだ。いくら言葉が汚くても、おれたちが投げ合っているのは、心だから。」